

オノマトペの促音

那須 昭夫
(筑波大学)

本発表では日本語のオノマトペに現れる促音の性質およびその音韻論的問題について検討する。オノマトペの促音には強調辞として語中に現れるもの（語中促音）と接尾辞として語末に現れるもの（語末促音）とがあるが、このうち音韻論的観点から見てより多くの問題を含むのは後者のほうである。なぜなら、日本語一般において促音は語末位置に現れることができない中で、オノマトペに限っては「バタッ」「ドドッ」などの語形に見るように、語末に促音を含むパターンの存在が認められているからである。日本語の音配列制約に照らした場合、語末促音は極めて異例な構造のはずである。しかし、従来のオノマトペ論ではその異例さが特に問題視されてきた経緯は見られない。むしろ語末促音は、当該の語がオノマトペであるがゆえに特有に認められる音韻構造と目されてきた節がある。そこで本発表では、オノマトペの語末促音の性質について、その認定（そもそも真に促音と見なされるべきものなのかどうかという点）も含めて再検討すべき余地があることを論じる。

本発表の前半では、同じ固有語である和語との異同を視野に入れながら、語中・語末それぞれの環境に現れる促音の特徴について素描する。促音に関する諸制約（鼻音後有声化・有声重子音回避・末尾子音制約）を通じて見ると、これらを最も順当に満たすのは接尾辞付加形をベースとして挿入される語中促音（例：バッタリ）である。一方、同じ語中促音でも反復形をベースに挿入されるものでは、末尾子音制約を除く二つの制約が無視されることがある（例：スッベスベ）。さらに語末促音に至っては、末尾子音制約さえも元来満たされていないなど、構造上の有標性が色濃く見られる（例：バタッ）。

発表の後半では語末促音に焦点を絞り、その機能上の特性について検討する。従来、オノマトペの語末促音には動作の瞬間性や物体の硬性を表す音象徴機能が備わるとされてきたが、本発表ではその観察に疑義を呈し、まずは辞典掲載語形の調査に基づいて、語末促音がオノマトペの接尾辞として無標かつ透明な性格を有していることを主張する。続いてオノマトペの種々の語形における韻律構造の検討を通じて、語末促音が主要部末端型のプロソディをもたらず韻律的な調整要素として機能している可能性について論じる。オノマトペの語形のうちとりわけ口頭発話に頻出する形態では、その多くにおいて語末に重音節を具有する構造が一般的に見られる。この構造は韻律主要部が末端に形成されたパターンだと換言できるが、オノマトペの促音はそうした末端型のプロソディの形成に寄与する振る舞いを見せている。本発表ではこの点について、韻律構造に観察される特徴ならびに語形の史的変遷の事実も加味しながら検討する。

参考文献

那須昭夫 (2007) 「オノマトペの語末促音」『音声研究』11-1, 47-57.